

## フランス語の隠れたしくみ

### 13. 数量表現と意味の重み

東郷雄二

4月から本誌を読み始めた読者もおられると思うので、昨年度から続いているこの連載の趣旨を説明しておこう。この連載では、フランス語を学習するときに習うことの少ないテーマを取り上げ、それを「隠れたしくみ」と呼んでいる。なぜ隠れてしまうのか？理由はいろいろある。語形から始めて次に用法を説明する伝統的教授法にも問題があろう。フランス語と日本語の文法構造がちがうのも理由のひとつだろう。しかしいちばん大きな理由は、「コトバは意味を伝えるためにある」という事実がしばしば忘れられるからではないだろうか。意味とは私 が あなた に伝える生モノである。意味は 私 の側にあるのも あなた の側にあるのではない。コトバという相互行為によって、私 と あなた のあいだに立ち上がるものである。ところが教科書に載っている例文には 私 も あなた もいない。だから意味が立ち上がるしくみが隠されてしまう。このしくみをもう一度掘り起こしてみよう。このような見方に立ってフランス語をもう一度眺めてみたい。

#### 伝える意味の重さと軽さ

さて、かんたんな所から話を始めよう。un livre, deux livres はどう訳せばいいだろうか。「バカにするな!」と怒らずに考えていただきたい。たいていの人は「1冊の本」「2冊の本」と訳すだろう。だがもう少し考えてみよう。私の娘が幼かった頃、その日にあった出来事を話していて、「そこへ一匹の犬がやって来たのよ」と言うのを聴いて仰天したことがある。これは明らかに本を読み聴かせてきたために起きた書き言葉の刷り込みのなせる業である。ふつう私たちはこんな風には話さない。「そこへ犬が一匹やって来たのよ」と言う。文房具店に行って買い物をする場面を想像していただきたい。「一本の鉛筆を下さい」と言う人がいるだろうか。これは日本語としておかしい。「鉛筆を一本下さい」と言うにちがいない。

なぜ「一本の鉛筆を下さい」はおかしいのだろうか。ここで文中での 意味の重み ということを考えてみよう。文房具店で買い物をするとき、相手に伝えなくてはならない重要な情報は「何を」「どれだけ」である。つまり、品名と数量が大事な情報である。文中で特に重要な情報を担う項目を、言語学では「焦点」と呼んでいる。文房具店の場合では「品名」と「数量」はどちらも重要な情報であり、両方とも焦点になっていなくてはならない。ところが、「一本の鉛筆」という大きな名詞句にしてしまうと、「鉛筆」は焦点になるが「一本」は焦点にならない。だから「一本」を取り出して後ろに回して「鉛筆を一本下さい」と言うのである。ここから少なくとも日本語に関して、次の2点がわかる。

(A) 数量表現は文中で焦点として働く

(B) 数量表現を焦点として働かせるには、大きな名詞句から出して後ろに置く  
数量表現が文中で焦点として働くのは、日本語にもフランス語にも言える。焦点の  
性質のひとつとして、焦点は否定される対象となるというものがある。

(1) Je n'ai pas *beaucoup de temps*.

(2) Il n'a pas *trois enfants* ...

(1)は「私には時間があまりない」だが、「時間がない」と言っているわけではない。  
否定の *ne... pas* は *beaucoup de* にかかっており、「時間はあるが、たくさんではない」  
という意味になる。(2)は *mais deux* と続くのが自然で、「彼には子供が3人いるので  
はなく、2人だ」のように、否定は *trois* にかかる。このように数量表現は確かにフ  
ランス語でも焦点として働いている。

フランス語が日本語とちがうのは、*beaucoup de temps* のように大きな名詞句に含  
まれていても *beaucoup de* は焦点として働くことができるという点である。「鉛筆  
を3本ください」と言うときは *Donnez-moi trois crayons*. でOKで、*trois* はその場所  
で焦点となる。これは日本語のように数量表現だけを後ろに回すしくみがフランス語  
にはないためだろう。× *Donnez-moi crayons trois*. とは言えないのである。

このことを念頭に置いて、次の例を訳してみたい。

(3) *Beaucoup de chercheurs pensent que la Terre est en train de se réchauffer*.

(4) *Certains collègues se moquent d'Isabelle*.

(3)は「多くの研究者は地球が温暖化しつつあると考えている」、(4)は「何人かの  
同僚はイザベルのことをバカにしている」と訳した人が多いだろう。しかしこれは  
はっきり言って誤訳である。「一本の鉛筆」型の訳になっているからだ。「地球が  
温暖化しつつあると考えている学者が多い」「イザベルのことをばかにしている同  
僚が何人かいる」と訳するのがよい。次の文は数量表現をふたつ含んでいるので、さ  
らにむずかしい。自分で試してみられたい。

(5) *Beaucoup de gens se plaignent qu'on ne puisse visiter tout à fait librement certains  
pays*.

お奨めの訳は「まったく自由に見て回ることができない国がいくつかあると不平を  
鳴らす人が多い」となる。

これはなぜか。上の(A)と(B)を組み合わせるとこうなるのだ。(3)では *beaucoup  
de chercheurs* が数量表現 *beaucoup de* を含んでおり焦点になる。ところが日本語の「多  
くの研究者」では、上に見たように「多くの」が大きな名詞句の中では焦点として  
働けない。だから、取り出して後ろに回して「研究者が多い」としなくてはならな

いのだ。

躓きの石 plus ou moins

比較表現の plus は「より多く」で moins は「より少なく」だということは誰でも知っている。ではそれを組み合わせた plus ou moins はどうかというと、これほど理解されていない表現も珍しい。辞書を引くと「多少とも」「多かれ少なかれ」という訳語が載っているが、これがまた誤解の元なのだ。この訳語でうまく行く例ももちろんないではない。次は『ディコ仏和辞典』（白水社）の例文である。

(6) Tout homme est *plus ou moins* ambitieux.

「どんな人にも多かれ少なかれ野心はある」

だが次の例はどうだろう。「人間のなかには理解の早い人も遅い人もいる」という話の続きである。

(7) Il n'importe point que nous ayons compris *plus ou moins* vite.

「多少とも早く理解したということはちっとも重要なことではない」などと訳すと、何が何だかわからなくなってしまう。「理解が早かったか遅かったかは重要なことではない」という意味である。次の例もそうだ。

(8) Trente ans assise à attendre la fin du spectacle! Et il y a des pièces qui sont *plus ou moins* longues. C'est dur le métier d'habilleuse.

「芝居がはねるのを待って30年さ。芝居には長いのもあれば短いのもある。衣裳係の仕事はきついんだよ」

(9) Utiliser des accords *plus ou moins* riches selon le style. Quels sont les accords à utiliser pour le rock, le blues ou le jazz?

「スタイルに応じて豊かな和音とシンプルな和音を使い分けること。ロックやブルースやジャズにはどのような和音を使えばいいだろうか」

なぜこうなるか。plus ou moins は数量表現の一種であり、数量表現は文中で焦点として働くという「隠れた仕組み」が理解されていないからである。(9)では音楽のスタイルに応じて使う和音の豊かさには「程度の差がある」という点に意味の重みがある。〈plus ou moins A〉を「多少ともAだ」と訳すと焦点はAになる。上に見たようにこう解釈すべき例もある。しかし〈plus ou moins A〉のなかには「Aには程度の差がある」と取るべきケースがある。日本語にもフランス語にも「焦点は文の後ろに置け」という原則があり、〈X Y〉という順番で並んだらふつうは後ろにあるYの方が焦点になる。しかし数量表現は他の要素を押しつけて焦点として働くことがある。

だから<X Y>という並びでもし X が数量表現だったら，Yを差し置いて X が焦点になることがあるのだ。「多少とも」「多かれ少なかれ」という辞書の訳語は，このしくみを反映していない。

plus ou moins にはもうひとつおもしろい使い方がある。

(10) Oui, je suis sortie *plus ou moins* avec un garçon.

「多少とも男の子とデートした」ではチンプンカンプンだろう。女性の私が昨日太郎君と動物園に行ったとして，それが「男の子とデートしたと言えなくもない」という意味である。つまり *sortir avec un garçon* 「男の子とデートする」という表現が程度の差はあれ，まあまあ当てはまるということを表わす。この用法には専門的には「メタ言語的量化」というオソロシイ名前がついている。

さて「文中の数量表現は特に意味の重みを担うことがある」という隠れたしくみをご理解いただけたらうか。ラーメン屋に入ってうっかり「2杯のチャーシューメンください」などと言わないために覚えておいていただきたい。まあそんな風に言う人はいないだろうが。 . . . (とうごう・ゆうじ)